

# Newsletter vol.22

## フライブルクにて思うこと

外国語教育研究センター教授 加藤 耕義

「おそらくエメンディンゲンやグンデルフィンゲンみたいな田舎でも、アムステルダムにいるのと同じくらい、その気さえなれば、世の中のあらゆる物事の移ろいやすきに思いを巡らす機会は毎日でもあるでしょうし、たとえ自分のためにたくさん丸焼きが空中を飛び回っていても、自分の運命に満足する機会は毎日でもあるでしょう。ところが、きわめて奇妙な回り道をして、あるドイツの職人見習いが、アムステルダムで誤解を通して真理にたどりつき、真理を認識するに至ったのです。」

これは、ヨハン・ペーター・ヘーベルの寓話の編「ワッカリマゼンさん(Kannitverstan)」の冒頭です。大都会にやってきた若者が立派な屋敷を見て、「これはどなたのお屋敷ですか?」と質問します。するとドイツ語がわからないオランダ人は「ワッカリマゼン」と答えます。つぎに、立派な船から次々と荷がおろされているのを見て、「これはどなたの船ですか?」と質問します。荷をおろしていた男は「ワッカリマゼン」と答えます。若者が、「ワッカリマゼンさん」というのはよほどの金持ちにちがいないと思いながら歩いていくと、こんどは大きな葬列に出くわします。列の最後の男に話かけると、やはり「ワッカリマゼン」と答えて返ります。すると若者の目から大粒の涙がこぼれ、どんなに金持ちだろうが自分のような貧乏人だろうが、人間最後はみな同じだと悟ります。若者が一言も理解できないオランダ語の葬式の説教を聞いて、これまで聞いたどんな説教より感動させられたというお話です。

冒頭のエメンディンゲンとグンデルフィンゲンというのは、ドイツのフライブルク近郊の村です。本学ドイツ語講師ダニエル・ケルン先生はこのエメンディンゲンの出身です。そして私はフライブルク大学留学中にグンデルフィンゲンに暮らしていました。そんな縁もあって、この夏25名の学生がフライブルク大学と学習院大学の協定プログラム「日本人学生のためのサマープログラム - ドイツ語とドイツ文化」に参加しています。これはドイツ語初学者を対象とした語学研修で、ケルン先生は毎年夏のサマープログラムで講師をしています。

さて、今から200年前の上の文章には、今の時代にも意味深いメッセージがあります。今やインターネットとグローバル化の時代。そのおかげで、どこでも十分に世界の情報が得られるし、文化が平均化して金太郎飴みたくになっていると考える人が多くな

っているように見受けられます。しかし一度外国にでると、そこにはその土地独特の文化があることにすぐに気づかれます。食べ物、習慣、仕事、言葉など、ドイツ特有、フライブルク特有のものがないことはありません。それはインターネットを見ただけでは、なかなか感じ取ることができません。見て、触れて、嗅いで、食べて、言葉と交わして、はじめて理解できることがたくさんあります。ですから、直接異文化に触れた人にとっては、たとえそれが誤解をしたことだとしても、とても本質的な体験になります。今回の参加者も多くは理解と誤解を通してそれぞれの人生にとって、とても重要な体験をしていると思います。

ヘーベルの文章には、「ハトの丸焼きが口の中に飛び込んでくることはない」という諺も隠れています。だれかが何かをしてくれると思ってほけ一つと待っていても、何もおきません。こうして国外にでると、そのことにすぐに気づかれます。今回の参加者もみな積極的に、自分からさまざまな体験を求めています。

彼らはみな積極的に行動して、理解と誤解を通して、きっとそれぞれにとっての真理(die Wahrheit)にたどり着くことなのでしょう。みなとても好奇心旺盛で感受性豊かで行動的な今、短期でもいいですからぜひ異文化に触れてみてください。きっと真理に近づくことができると思います。

真理に近づくかどうかです。それは、フライブルク大学第一講義棟に大きく掲げられている motto を紹介しましょう。「真理は君たちを自由にする。Die Wahrheit wird euch frei machen.」(この原語は、今夏、加藤先生がフライブルク滞在に書いてくださったものです。)



▲フライブルク大学リストレス像の前で



▲フライブルク大学「真理は君たちを自由にする」

## 国際交流センターでは、2007年度から、新たにイタリアのポローニャ大学とフランスのリヨン第二大学に学生の派遣

### ポローニャ大学(イタリア)留学体験記

#### 文学部史学科3年 鈴木 サマンサ

2007年8月末から2008年6月末までの10か月間、本学からは初めての派遣学生として、私はヨーロッパ最古の大学であるポローニャ大学に留学してきました。

何も情報がないまま、右も左も分からずポローニャの街に飛び込んだ私は、まず住居探し、そして食べ物を得られるところ、という生活していくために最低限の事は知ることが必死でした。周りはどこを見てもイタリア人です。自分には社会的だと思っていた私ですが、違う言葉に囲まれ、更に英語もほとんど通じないという中で完全に委縮し、こんな中で10か月も生きていくことができるのだろうかかと不安になりました。

そんな中、私を一番不安にさせたのは、住居が見つからないという点でした。しかし今になってみると、シェアメイトを探している学生はいくらでもいるのです。大学の掲示板にはそのようなシェアメイト募集のチラシが所せましと貼ってあります。もちろん自分から連絡をとり、コミュニケーションをとりなくてはならないのですが、そうだったことを怖がらないで、他の学生さんや日本人に接することも、ポローニャで生活していくうえでとても大切なことになりました。

ポローニャ大学は留学生の受け入れが盛んなため、世界中さまざまな国の学生と文化交流をしながら、同じ大学で学ぶことができた、というのが、大きなかけがえのない経験となりました。そんな考えがきっかけで、同じ語学レベルの学生たちと毎日一緒にイタリア語を学び、一緒に宿題を解き、学んだばかりのイタリア語の構文を使って帰りにおしゃべりしたり、とお互いの友情を深めていきました。留学生のためのイベントが豊富なこともこの大学の特徴でした。昼間は学生がコーヒーを飲んだり勉強したりしているBarが、夜になるとパーティー会場となり、ポローニャ中の留学生が集まり、打ちとけて、お互いの国の文化を伝えあっていました。ポローニャで出会った学生はだれもがとても異文化を知ろうとする姿勢が強かったため、お互いの国の考え方や、生活習慣、学習について意見を交わすことも多く、そうすることで自分の国を客観視できたため、逆に自分の国を前よりも知るきっかけとなったと思います。

ポローニャ大学の場合、留学生はひとつの学部にも所属しているというわけではないので、自分が興味のある授業ならば、どの学部・学科の授業でも受講することができました。授業の形態は日本とあま



▲留学生との交流パーティにて(真ん中、赤い眼鏡の学生の左隣が鈴木さん)

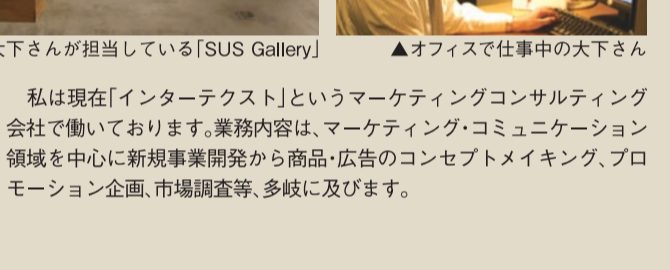
り変わりはなく、ほとんど講義形式でした。異なったのは、授業時間の長さや、時間割です。授業によって一コマ2時間であったり3時間であったり、週2日であったり3日であったり、開始時間も終了時間も授業によってまったく異なるので、時間割の組み合わせが大変でした。その分週に2〜3科目程度の授業だけ取り、その授業を集中的に学ぶ、という形でした。講義内容はもちろんすべてイタリア語です。慣れない耳で必死にイタリア語を聞き取り、家で復習したり、教科書を訳して理解できなかった点を明確にしたり、教授に質問したり、というように勉強していました。

約1年間の留学を通して感じたのは、外国では自分から動かなければ何も得られない、ということ。逆にいえば、自分から求める人には誰もとでも協力的で、本当に親身に助けられるのです。そうすることで語学のみならず、人との関わり方も学んだように思います。留学は、語学を学ぶことも自分の学びたかった教科の分野を伸ばすことももちろん大切ですが、そういった外国の人とかわることで見えてくるもの、また、そこから何かを吸収することが自分自身を大きくしてくれるのだな、と感じました。



▲ポローニャの塔から見た風景(鈴木さん撮影)

## お元気ですか、センパイ!?



▲大下さんが担当している「SUS Gallery」 ▲オフィスで仕事の中の大下さん

私は現在「インターテキスト」というマーケティングコンサルティング会社で働いています。業務内容は、マーケティング・コミュニケーション領域を中心に新規事業開発から商品・広告のコンセプトメイキング、プロモーション企画、市場調査等、多岐に及ぶ。

### intertext inc. IMCコンサルタント 大下 哲平 (2003年3月経済学部卒業)

現在は主に「Shino Eclat」というジュエリーデザイン会社のオンラインショップの企画運営と「SUS Gallery」というステンレス素材のブランドインクスペースの企画・運営を中心に担当しております。

留学は、大学3年生の時に、協定校であるニュージーランドのVictoria University of Wellington (VUW) に行かせて頂きました。大学在学中は、国際交流に関するワークショップの企画・実施を行ったり、アメリカに留学する日本人の高校生を現地に引率するボランティアに参加したり、また、ゼミでは組織論やベンチャービジネスを学んでおりました。

これらの活動を通じて、何か新しいものを創発する場作りや学びの仕組み、コミュニケーションそのものに興味を持つようになり、それを次のステップに進めたいという思いから、留学という選択肢を選びました。これらの領域は、ひとつの学部や学科というくくりでは捉えきれないため、留学先では、異文化と教育という切り口でAsian Study or Education、コミュニケーションの学びにはLinguisticsやManagement Communication、創発のための仕組みを学ぶInnovation & Managementなど、自分のテ

## を始めました。今回は、両大学に派遣学生第1号として留学した鈴木さんと吉野さんに体験記を綴ってもらいました。

### リヨン第二大学(フランス)留学体験記

#### 文学部フランス文学科4年 吉野 藍

「留学」という言葉から、皆さんは何を連想するのでしょうか?私の場合は、「大きく帰ってくる」です。ただし、留学前はこの「大きく帰ってくる」が「体重が増える」という意味でした。そんな考えが持っていなかった私が、まさか1年間もフランスの大学に通うんだなんて、思ってもいませんでした。というのも、今まで学習院大学にはフランスに協定校がなかったため、留学に対してそれほど強い気持ちがありませんでした。それがたまたま、リヨン第二大学と協定を結んだというところを知り、せっかくのチャンスを利用しないわけには、と思いつくことにしました。ただ、前例のない留学だったので、準備が相当苦労しました。まさに暗中模索。なんとか院生の先輩を紹介してもらったり、ドイツに留学する友人に話を聞いたりと、色んな人を頼らせてもらいました。行ってみたいのは、ドイツとフランスは隣り合った国ではあるけれど、全く環境が異なるということでした。EU圏内だから似たようなものだろうと考えた私は、かなり甘かったです。

渡仏後も暗中模索は続きました。リヨンに着いたはいけけれど、



▲バレーボールのチームメイトと(最後列真ん中が吉野さん)

寮も、スーパーも、バス停も、どこにあるのかわからない。しかも、寮のトイレに紙がない。もちろんホームシックになりました。

こんな私の留学生生活を充実したものにしてくれたのは、体育で選択したバレーボールです。バレーのおかげでたくさんの人と出会うことができたし、ずばずば経験をしていくことができました。

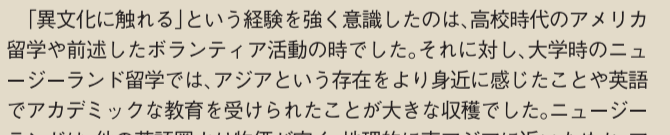
初めてのバレーの授業の帰り際、先生から紹介したい人がいると言われ、意味もわからず立っていたら、去年福岡に留学していたという学生を紹介されました。その人もバレーを選択していて、日本人が来るのを待っていたのだそうです。待っていたなんて言われたら、うれしくないわけがありません。すぐに仲良くなって、留学中とはお世話になりました。

また、週に一度対外試合を行うクラスを選んだので、試合を重ねるごとにチームの結束力も高まり、試合の後にご飯を食べたり、クリスマスにプレゼント交換をしたりするようになり、試合も、運ぶのか実力なのか、どんどんと勝ち進み、気が付けば市大会で優勝、さらに県大会でも優勝するという快挙を成し遂げました。優勝するも、メダルももらうのも、新聞に載るのも、全てが初めての経験で興奮していたら、先生から「日本でも自慢しているのよ」と言われたので、この場を借りて自慢させてもらいました。

日本に帰ってきて、留学前と同じ生活をしているのも、新たな発見があったり、それまでとは違った物の見方や考え方を自分から持っていることに気がしました。自分の成長が感じられるので、私も「大きくなって帰ってきたんだ」と実感しています。多くの人の支えがあって、無事に終えることができたこの留学は、私にとって本当に価値あるものとなりました。ちなみに、体重が増えたかどうかは割愛させていただきます。



▲リヨン最大の冬の祭り「光の祭典」(吉野さん撮影)



▲ラダにゆられて in モロッコ

マに関わる領域を組み合わせて学びました。

「異文化に触れる」という経験を強く意識したのは、高校時代のアメリカ留学や前述したボランティア活動の時でした。それに対し、大学のニュージーランド留学では、アジアという存在をより身近に感じたことやアカデミックな教育を受けられたことが大きな収穫でした。ニュージーランドは、他の英語圏より物価が安く、地理的に東アジアに近いため、アジア出身の学生が多く、そのせいか、レストランのメニューはアジア料理の種類が豊富で、アジア料理専門のレストランも思いのほか多く存在していました。そのような環境で、他国の中の日本人というよりは、アジア人としての視点で考えられるようになりました。

留学を通じて「学び」が、現在在どのようなように生かされているのか一言でまとめるのはなかなか難しいですが、わかりやすい例では、担当している「SUS Gallery」のプロジェクトがあげられると思います。このプロジェクトでは、日本人スタッフの他に、タイ人やドイツ人のインターン生とも活動を共にし、英語でビジネスのコミュニケーションを行っています。ミーティング

では英語と日本語で議論し、英日両方のデータをリサーチし、議論録をそれぞれの言語で作成します。私は英語と日本語を扱うため、議論の中で通訳のような機能を果たすことや、関を取り持つような動き方をすることもあります。このような役割を果たす際に、価値観の違いに少し敬意を持ち、その違いを認めながら合意点を探る自身の姿勢は、留学時の経験が生かされたものかもしれないと感じます。

留学という経験が何をもちますか人はそれぞれだと思いますが、これから留学されるか、あるいは、留学をお考えの皆さんが、異文化に触れることで新たな可能性を開いていくことを心より願っております。

●大下さんは、大学時代に自転車愛好会でも活躍されていました。忙しい仕事の間をぬって、VUWへの派遣学生にアドバイスしてくれるなど、面見の良しい優しい先輩です。

なお、「Shino Eclat」と「SUS Gallery」は、現在共にインターン生を募集しているため、興味のある学生さんは連絡してくださいとのことでした。(Mail address: teppei.oshita@intertext.co.jp)

## 平成21年度学習院大学海外留学奨学金の募集について

本学では、経済的な面から皆さんの留学を支援するため、海外留学奨学金制度を設けています。本学独自の学内奨学金なので、学外のものに比べ、奨学金が得られる可能性は比較的高いと言えます。この奨学金を利用し、一人で多く多くの学生さんが留学できるように願っています。

選考は、書類および面接により行われます。面接を受けることが求められますので、下記の募集スケジュールを参考に、自分の留学の予定に合わせ、応募してください。

平成20年度の募集はすでに終了しました。平成21年度第1回目の募集については、国際交流センターのHPでお知らせします。

なお、本奨学金制度は、平成21年度から、奨学金額についての変更が予定されています。これを機に奨学金額は一律50万円でしたが、来年度からは、50万円を限度として、個々の留学内容等に応じた額が支給されるようになります。詳細は、国際交流センターまでお問い合わせください。

応募条件: 「留学願」が承認されている者。(海外の大学・大学院等に留学が決定しているか、出願の者で、奨学金給付時まで「留学願」が承認されることが見込まれる者を含む。) 他

※出願時点で「留学願」が承認されている必要はありません。

奨学金額: 1人50万円以内(給付)(予定)

募集人数: 20名(年間)

募集日程:

年度	募集時期(応募締切)	留学期間
21年度	第1回(平成20年12月) 第2回(平成21年6月)	①H21年4月~H22年3月および ②H21年10月~H22年9月の者

※ただし、留学期間が①の者は第1回に応募するが望ましい。

## 平成20年度大学院学生 国外における研究発表援助について

研究発表援助については、昨年度より、年1回の募集に変更となりました。現在、今年度の出願を受け付けています。募集要項は国際交流センターで配布しています。

## 2009年度協定留学プログラム(第2期)派遣学生募集中!

国際交流センターでは、現在、2009年度第2期(派遣先: 中国、アメリカ、ヨーロッパ等・留学期間: 2009年10月~2010年9月)の出願を受け付けています。募集要項は国際交流センターで配布しています。多くの皆さんの出願をお待ちしています。

なお、2009年度第1期(派遣先: 韓国、タイおよびオーストラリア等・派遣期間: 2009年4月~2010年3月)の募集はすでに終了しました。

2008年度協定留学プログラムによる派遣学生の皆さんは以下のとおりです。

派遣先大学	派遣学生
オーストラリア国立大学	文学部哲学科3年 長高谷 奈月
慶北大学校	経済学部経営学科3年 金 炳進
慶北大学校	人文科学研究科史学専攻修士後期課程3年 大和 朋子
チュラロンコン大学	経済学部経済学科4年 藤澤 純策
復旦大学	文学部史学科3年 倉井 一光
復旦大学	経済学部経営学科2年 栗津 加奈子
ノースカロライナ州立大学 シャーロット校	経済学部経営学科2年 高塚 悠平
オックスフォード・ブルックス大学	文学部英米文学科3年 高橋 直子
オックスフォード・ブルックス大学	文学部英米文学科2年 長谷川 一城
エディンバラ大学	文学部英米文学科4年 加藤 祐里
パイロイト大学	文学部ドイツ語圏文化学科3年 我澤 はな子
リヨン第二大学	人文科学研究科史学専攻修士後期課程3年 大剛 雅人
リヨン第二大学	人文科学研究科フランス文学専攻修士前期課程2年 長谷川 じよ

## 表紙の写真について

今回、表紙に使用した写真は、人文科学研究科日本語日本文学専攻博士前期課程1年 丸岡さんが撮影したものをお借りしました。ファッション越しに覗いたキャンパスは、いつもとはまた違った印象を与えてくれると思います。カメラが趣味の丸岡さんには、他にも何か国際交流センターに飾ってありますので、ぜひ、見に来てみてください。一見の価値あり!